

37 エコール・ド・パリの寵児：藤田嗣治（レオナール・フジタ）

エコール・ド・パリを代表する画家のレオナール・フジタ（藤田嗣治）（1886-1968）は、フランスで活躍した日本人の中で最も有名な人物の一人です。

藤田が初めてフランスの地を踏んだのは、1913 年でした。藤田のフランス生活は、パリのモンパルナスから始まりました。そこで、当時モンパルナスで生活していた巨匠のパブロ・ピカソや親友のモディリアーニと出会うという幸運にも恵まれました。しかし、第一次世界大戦が始まり、フジタの画家としてのキャリアは困難なスタートとなりました。最も苦しいときは、暖をとるために自ら描いた絵を焼いてしまったこともありましたが、絵を描くことを止めることはありませんでした。フジタは自分なりの独特のスタイルを求めて 1919 年に初めて裸婦を描き、これが「乳白色の肌」と呼ばれたフジタの作品の始まりとなりました。次第に画家としての地位を認められ、1929 年に完成した[パリ国際大学都市の日本館](#)に、「欧人日本への渡来の図」と「馬の図」を収めました。



Léonard Tsuguharu
FOUJITA
藤田嗣治

第二次世界大戦が勃発し、1940 年に藤田はフランスを離れざるを得なくなり、日本に帰国しました。しかし、戦争で揺らぐ日本社会に馴染めず、フジタは 1950 年にフランスに戻りました。フランスに骨を埋める覚悟を決めたフジタは、1955 年にフランス国籍を取得して日本国籍を抹消しました。1959 年にはランス大聖堂で受洗し、レオナルド・ダ・ビンチにちなんで、レオナールという洗礼名を授けられました。

そして、フジタは、1960 年 10 月、73 歳の時にパリ中心部から南西約 30 キロに位置するヴィリエール＝バークルに一軒家を購入し、翌年に転居しました。フジタは、ここで妻の君代とともに生活しました。この近くにあった友人の家を訪ねた際にこの地域を気に入ったことから、知人に依頼してこの地域で家を探しました。静かな環境にある住居兼アトリエで、フジタは制作に没頭しました。このフジタの家は、当時のフジタ夫妻の生活の様子を残した姿で一般公開されています。一階と二階が住居で、屋根裏のアトリエにはフジタが使った筆とパレット、日本語が書かれたシールが貼られた顔料の入った瓶やミシンなどが残されています。フジタが、1966 年にランスに建てたフジタ礼拝堂（平和の聖母礼拝堂）に描かれたフレスコ画の習作を見ることもできます。

37 エコール・ド・パリの寵児：藤田嗣治（レオナール・フジタ）

フジタは、日本とフランスのいずれにおいても戦争を体験し、生涯で5人の女性を愛し、晩年にはフランスに帰化し、病のために1968年にスイスで死去しました。激動の人生を歩んだフジタは、妻の君代とともに、自らが設計したフジタ礼拝堂で安らかに眠っています。

掲載日：2023年12月1日